

「あの夏の子供たち」

☆☆☆

2010 (平成22) 年4月26日鑑

賞<東映試写室>

監督・脚本：ミア・ハンセン＝ラブ

シルヴィア・カンヴェル (グレゴワールの妻) /キアラ・カゼッリ

グレゴワール・カンヴェル (映画プロデューサー) /ルイ＝ド・ド・ランクザン

クレマンس・カンヴェル (長女) /アリス・ド・ランクザン

セルジュ (グレゴワールの友人・映画プロデューサー) /エリック・エルモスニー

ノ

ヴァランティーヌ (次女) /アリス・ゴージェ

ピリー (三女) /マネル・ドリス

ヴァレリー (グレゴワールの助手) /サンドリーヌ・デュマ

アルチュール (若き新人監督) /イゴール・ハンセン＝ラブ

ベレニス (現場プロデューサー) /ドミニク・フロ

2009年・フランス映画・110分

配給/クレストインターナショナル

<映画のプロデューサーはこんなに大変！>

リーマン・ショックから少し回復したものの、世界経済が中国を除いて好転しない中、映画業界も大変なことは周知の事実。もともと映画をプロデュースするプロデューサーの仕事はバクちみたいなものだが、本作前半の主人公グレゴワール・カンヴェル (ルイ＝ド・ド・ランクザン) は実績もあり、誰からも愛されるやり手プロデューサー。そんなやり手になると、同時に数本の映画を掛け持ちすることになるが、そのすべてが成功するのはまれで、合計してトントンならマシな方？ところが、グレゴワールが経営する製作会社ムーン・フィルムは多額の債務を抱え、今や完全な破産状態らしい。

映画冒頭、車の中でもケータイを一時も手放さず、あちこちと通話を続けるグレゴワールの姿が描かれる。こんな生活を続けていたら、どこかおかしくなるのは当然だ。私がビックリしたのは、ケータイの他にタバコまで吸いながら運転していること。これでは時々両手ともハンドルから離れているから、危険この上なし。そう考えると、たまたまスピード違反で警察官に捕まったのは、重大事故を避けさせるための神様のおぼしめし？もっとも、スピード違反は泣き落とし戦術で何とかコトなきを得たらしいが、会社に戻るとたちまち資金繰りが大変。少しは妻のシルヴィア (キアラ・カゼッリ) に心配事を打ち明けたが、そうそう弱音を吐くわけにはいかないから大変だ。

グレゴワールは毎週末を家族とともにパリ近郊の別荘で過ごしているが、これではおちおち心を落ち着けることができないのでは？

<グレゴワールはなぜ自殺を？その点の説明は？>

本作が2作目となる1981年生まれ的女性監督ミア・ハンセン＝ラブにとって、1作目のプロデュースを所望していたアンベール・バルザンが2005年2月に突然自殺したことは大きなショックだったはず。ところが、そんな経験を元に自ら脚本を書いて、監督2作目のネタとするのだから、ハンセン＝ラブはたくましい。

私は弁護士という職業上、過去たくさんの破産申立事件をやったし、破産管財人もやってきた。また、そんな事件の中で自殺した人にも何人かタッチしてきた。しかし、日本の破産法は基本的に破産者を救済するための法律。個人なら免責が必要だが、会社の場合は債権者にどれだけ弁済できるかに関わらず、解散することができる。したがって、会社の代表者が自殺する必要などさらさらないのだが、ハンセン＝ラブの友人だったアンベール・バルザンはなぜ自殺を？そしてまた、本作においてグレゴワールはなぜ自殺を？

映画前半は、敏腕プロデューサーだったグレゴワールが借金の返済と数本の映画完成に向けて努力しながらも、疲れ果てていく姿が描かれる。しかし、それを観ていても、なぜグレゴワールは自殺を？という疑問を解消することはできない。ハンセン＝ラブ監督自身がアンベール・バルザンからなぜ自殺したのかを聞いていないのだから、ハンセン＝ラブ監督がそれを十分映像上で表現できないのはある意味仕方ないかもしれないが、私にはやはりグレゴワールの自殺が唐突に映るため、その点が少し不満。

<本作後半のテーマは、心の再生>

本作は1時間50分の映画だが、きっちり前半は喪失の物語、そして後半は再生の物語に色分けされている。したがって、前半の主人公はグレゴワールだが、後半の主人公はシルヴィアと長女クレマンス (アリス・ド・ランクザン)、次女ヴァランティーヌ (アリス・ゴージェ)、三女ピリー (マネル・ドリス) という3人の娘たちになる。突然夫を失ったシルヴィアは悲しみに浸る暇もなく、ムーン・フィルムの負債処理と製作中の映画の処理に追われたのは当然だが、シルヴィアは強い。スウェーデンまで飛んで、ロシア人のプロデューサーと交渉したり、現像所に乗り込んで債務の圧縮を直接要請したり、とシルヴィアは八面六臂の大活躍。ちなみに、弁護士の私としては、シルヴィアやムーン・フィルムのスタッフたちがなぜちゃんと弁護士に依頼して、グレゴワール自殺後の事態收拾に動かないのかが少し不満。したがって、ラストに至って財産管理人がなぜ「万策尽きた。ムーン・フィルムは清算するしかない」と宣言することになるのかもイマイチ理解できない。

もっとも、本作ではそんな法的処理の仕方が問題なのではなく、シルヴィアと3人の娘たちの心の再生がテーマ。シルヴィアが「イタリアに帰る」ことを提案している姿を見ていると、シルヴィアはフランス人ではなく、イタリア人？ところが、「パパの近くにいたい」というのが娘たちの一致した気持。それほど、パリのまちが子供たちの心の中に生きているわけだ。また、ムーン・フィルムの事務所にあったグレゴワールがプロデュースした映画のフィルムは取り上げられても、グレゴワールの映画、そしてグレゴワールの魂は永遠にシルヴィアと3人の娘たちの心の中に生き続けているわけだ。

<思春期の長女の再生にも注目>

グレゴワール死亡後の後半はシルヴィアを中心とする会社の再建と家族の再生の物語が描かれていくが、そこで意外な「活躍」をするのが長女のクレマンス。幼い2人の妹と違い思春期にある彼女は、毎週別荘地で家族が過ごすこと自体が拘束だと捉えていたようで、映画前半では不機嫌そうな顔が多かった。しかし、後半になると次第に母を支え妹たちの面倒をみるしっかり者の面を見せていく。

本作を観ていて意外だったのは、グレゴワールには別に息子がいるらしいことをクレマンスが聞きつけたこと。そりゃホント？あれほど家族を愛していたグレゴワールに女が？そして子供まで？クレマンスからそんな疑問を投げかけられたシルヴィアは「スウェーデンから帰ったらゆっくり話す」と説明したが、クレマンスは留守中にシルヴィアの部屋からグレゴワール宛てに送られてきたイザベルという女性からの手紙をみつけて読んだため、グレゴワールにはムーンという息子がいたことを知ることに。こんな場合子供は二重のショックを受けて、下手するとブチ切れてしまうものだが、さてクレマンスの場合は？

他方、あの年頃ともなればボーイフレンドの1人や2人いるのが当然だが、クレマンスの場合は？クレマンスにとって今父親を理解するためのベストの方法は、父親がプロデュースした映画を観ること。そんな中で偶然再会したのが、グレゴワールに対して新作映画の脚本を持ち込んでいた若き新人監督アルチュール (イゴール・ハンセン＝ラブ)。当然のようにアルチュールとの間に発生した淡い恋模様は、クレマンスの心の再生にいかなる好影響を？

2人の幼い妹の再生は母親が支えなければならないが、このように自らの力で再生の道を模索していくクレマンスのたくましさにも注目したい。

2010 (平